

聖書：マタイ5:5

説教題：柔和な者は幸い

日時：2017年3月19日（朝拝）

山上の説教の3つ目、「柔和な者は幸いです」を見て行きます。柔和な人とはどんな人でしょうか。怒りっぽくなく、人と争わず、穏やかで、いつも笑みを絶やさない人というところでしょうか。広辞苑を引くと柔和とは「性質がやさしくおとなしいこと」と出て来ます。さてこの言葉は聖書では他の言葉にも訳されています。5節の「柔和な者」という部分には印がついていて、欄外を見ると、「あるいは『へりくだった者』」と記されています。他の箇所では「謙遜」また「やさしい」とも訳されています。

今日のみことばを考える上で大切な問いは、果たしてこんなことでこの世を勝ち抜いて行けるのかということです。この世は弱肉強食の競争社会で、柔和な態度で人に優しく接していたら、自分の祝福がなくなるのではないかということです。ある時、私は北海道を旅行していて駅で特急列車を待っていました。自由席のキップしか持っていなかったため、なるべく座れるように数十分前から並んで列の先頭にいました。そうしたところ、到着した列車は位置が少しずれて停車しました。すると私の後ろにいた地元の人らしい高齢の男性がススッと乗車口の一番近いところに行きました。乗ってもすぐ降りる普通電車なら争ってまで座りたいとは思わないのですが、北海道の特急はしばらく止まりません。しかも特別料金を払っているのですからなるべく座りたい。そこで私は一番最初に乗る権利をその人に乗っ取られないように私自身も乗車口の一番近くまで行きました。すると先ほどの高齢の男性は私をグイグイ押し、そこには入れないという態度を取るのです。そこで私は「あの～先に並んでいるんですけど」と言いましたが、その人はうなりながらグイグイ押し、ドアが開いたら先に乗ってしまおうというような勢いでいる。こんな時、柔和に人に道を譲っていたら損するのではないのでしょうか。私は若い時に一度ブランド品のバーゲン会場に行ったことがあります。普段買えない服で良いものがあつたら買おうと思って出かけたところ、何とある人と同じ商品を同時につかんでしまった。その時、柔和に対応したらどうなるでしょう。また海外宣教委員としてフィリピンに行った時に驚いたことの一つは、何車線もある道路ではみなが車線を無視して走っていることでした。とにかく先に頭を突っ込んだ方が勝ち。良くあれで事故が起きないものだと思いますが、そんな中、柔和に「お先にどうぞ、ハイあなたもどうぞ」とやっていたらいつまで経っても目的地に着けません。果たして私たちは柔和で

あることはできるのでしょうか。柔和でいると強い人々に虐げられ、踏み台にされ、いよいよ利用されるだけではないのでしょうか。だからそういった人々に負けないように！あなたももっと自分を主張し、自分をアピールし、人を押し退けてでも自分の祝福を勝ち取るように！そのように世は私たちに語っているのではないのでしょうか。しかしイエス様は「柔和な者こそ幸い」と言われます。これはどういうことなのでしょう。

まず心に留めたいことは、これは生まれつきの性質のことを言っているのではないということです。生まれながらにして他の人と比べて柔和で、落ち着いていて、優しい人がいるものです。人と争うことを好まず、情緒が安定していて、穏やか。そういう人にとって、今日のみことばは気持ちよく聞ける御言葉なのでしょう。恥づかしいことですが、私もどちらかと言うと、自分はこの御言葉によっては非難されないと最初、感じてしまいます。あの人、この人にとっては厳しい御言葉だろうが、私にとってはそれほどではない。私はこの幸いに近い人間かもしれない。しかしその人が本当に柔和かどうかを試す一番のテストは他の人から悪く取り扱われた時でしょう。私もある時、ある人からひどく言われたことがありました。家に帰ってからもムカムカしていました。そして電話をかけて言い返してやろうかと思い、電話を握っては戻し、またしばらく考えては行ったり来たり。その内、電話をかけてしゃべらないで切ってやろうか、無言電話で嫌がらせをしてやろうか、などとひどい考えが色々浮かんで来ました。念のため言っておきますが、私は結局今まで無言電話をしたことは一度もありません。ですからもし皆さんのところに無言電話がかかって来ても、「あ～これは阿部牧師のしわざだ！」と思わないでください。でもその時は本当に危なかった。一步間違えばそれをしていました。そのことを通して分かったことは、私は全然柔和ではないということ。何でもない時は穏やかな自分だと思っているけれど、何かあるといかにひどく反応してしまうことか。神の憐れみなしにはいつとんでもない罪を犯してしまうか分からない自分！いや私ばかりでなく、私たち皆がそのように生まれながら実は短気なのではないのでしょうか。ですからここでの柔和とは見せ掛けだけの表面的な柔和ではないのです。

ではこの柔和とはどういう柔和なのでしょう。それは「神によって私たちの内に形造られる柔和」であると言えます。そしてそれは先に見た 3～4 節を経て私たちに与えられるものでしょう。3 節に「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」とありました。自分は欠けだらけの者であり、神の前に靈的破綻者であることを認める者。そのような者を神は顧みてくださると言われました。また 4 節に「悲し

む者は幸いです。その人たちは慰められるから。」とありました。自分の罪を悲しみ、自分自身に絶望する者。そのような者を神は見捨てずメシヤによって慰めてくださると言われました。このようなあわれみに満ちた神を知り、神との深い交わりに生きる時、私たちは「柔和」な者となるのではないのでしょうか。この神を知らないと、私たちは自分の力で自分の祝福を得るために常に神経をとがらせていなければなりません。少ないパイを巡ってみんなでいつも駆け引きをしている。人生はサバイバルゲーム。気を抜いたらやられる。そんな中、私の足を引っ張ったり、メンツを傷つける人がいたら許せない。激怒し、二度とそんなことをしないように徹底的に叩きつぶそうとするでしょう。しかし私を心にかけて、あわれんでくださる神がおられることを知るなら、私たちの生き方は変わって来ます。私たちはその神に信頼して「柔和」に生きることができるのです。その人は人間的なずるい手を使って祝福を勝ち取ろうとはしなくなるでしょう。神が望まない方法で成功を手に入れようとはしなくなる。むしろ神に信頼している者として、神が喜ぶ道を選び取ります。時にそれは互いを愛する愛の実践として相手に良い道を譲ることであるかもしれません。自分が厳しい状態にあっても、他の人を思いやり、優しくすることかもしれません。そして一番のテストである、人に悪く扱われた時も自己防衛的に過剰反応しない。もちろん悪は悪であると述べることは大切なことです。正義が地に行なわれることを求めるべきです。しかし自分が傷つけられたという思いから、自分で復讐することをしない。ローマ書 12 章 11 節：「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。』」そして自分としては迫害する者のために祈り、進んで赦す心の用意を持ち、相手の悪に善を返して行く。これは神とお話をし、神に信頼する人のみになし得るわざでしょう。

このように見て来ると、柔和とは軟弱とは全く違うことが分かって来ます。むしろ柔和さは神に信頼する者が神によって持つことができる真の強さであることが分かります。柔和な人は自分の感情をコントロールし、正しく振る舞うことのできる人です。その人は神に感謝し、信頼している者として、神に喜ばれること、また人の益になることを優先して選び取ることのできる人です。

その人が幸いである理由が 5 節後半にこう記されています。「その人たちは地を受け継ぐから。」 「地を受け継ぐ」という言葉は詩篇 37 篇を背景とした言葉です。そして詩篇 37 篇全体が今日のマタイ 5 章 5 節の注解であると言えます。1 節と 2 節：「悪を行

なう者に対して腹を立てるな。不正を行なう者に対してねたみを起こすな。彼らは草のようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだ。」 この世ではしばしば悪を行なう者が栄え、やり手の人が成功します。そんな中、私たちの取るべき道が3節4節です。「主に信頼して善を行なえ。地に住み、誠実を養え。主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。」 さらに5~6節:「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。」 人間の知恵と力で祝福をもぎ取るのではなく、主に委ねて従うこと。そうするなら主が最善の時に最も良い祝福を与えてくださいます。7節以降:「主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。悪を行なう者は断ち切られる。しかし主を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。」 ここに「地を受け継ぐ」という言葉が出て来ます。また11節にも出て来ます。「しかし、貧しい人は地を受け継ごう。また、豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう。」 34節にもあります。「主を待ち望め。その道を守れ。そうすれば、主はあなたを高く上げて、地を受け継がせてくださる。あなたは悪者が断ち切られるのを見よう。」

旧約における「地」とは約束の地、パレスチナを直接的には指しますが、それは新約聖書から分かるように天国の写しです。旧約時代の土地は究極的には永遠の御国という相続を指し示します。つまりイエス様はここで柔和な者、神に信頼してへりくだって歩む者は、天の御国を受け継ぐと言われたのです。そこで真に持つべきまことの土地、いつまでもなくなならない永遠の財産を手にする者となると言われたのです。

最後に聖書の中から3つの実例を短く見て終わりたいと思います。一人目は創世記13章に出来るアブラハム。彼は甥のロトの家族と旅をしていましたが、それぞれの持ち物が多くて一緒に住めなくなった時、どうしたでしょうか。彼はロトに好きな土地を選ばせました。片方には良く潤っていたヨルダンの低地があり、もう片方には乾燥した地域がありました。どちらを選ぶかによって今後の生活は大きく違ってきます。そして何と年下のロトは遠慮もせず、よく潤った低地を選びました。その時、アブラハムは怒らず、不平を言いませんでした。彼は確かに柔和な人でした。彼はこのために祝福を失ったのでしょうか。続く記事を見ると、ロトが選んだ町はソドムとゴモラであり、その後まもなく大変なさばきを受けます。そのような流れの中にアブラハムは主の祝福の道を進んだ

ことが分かるのです。彼は地上では自分の妻を葬るための一辺の墓地しか手にしませんでした。彼は天の御国を待ち望んで生きた人であること、そしてそれを豊かに受け取る人であることを私たちは知っています。

ダビデもそうです。彼はイスラエルの初代王サウルに命を狙われ続けましたが謙遜でした。ある時、ダビデが隠れていた洞穴にサウルが一人で用を足しに入ってきたことがあり、その気ならサウルを打つことができました。ダビデの部下は、今こそサウルに手を下す時です！神が与えたチャンスです！と進言しました。しかしダビデはあくまでさばきは主に委ねて自分としては立てられた王に尽くし、謙遜であり続けました。そのように柔和に歩んだダビデは神によって豊かな祝福を受け、天においてもそうであることを私たちは疑わないのです。

そして究極の模範はイエス・キリストでしょう。イエス様はマタイの福音書 11 章 29 節で「わたしは心やさしく、へりくだっているから、・・・わたしから学びなさい」と言われましたが、そこで「心やさしい」と訳された言葉が今日の箇所の「柔和」と同じ言葉です。イエス様の生涯は神への信頼とセットになったへりくだりの生涯でした。不当な扱いを受けた時も、罵られても罵り返さず、苦しめられても脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せして歩まれました。その結果、この方は悪いくじを引いて終わりだったのでしょうか。ピリピ書 2 章 9 節には「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」とあります。神はこのように歩まれたお方をこれ以上なく高く上げました。ですから私たちはイエス様にならってへりくだり、柔和な者として歩むことに何の恐れもいらぬのです！その人は確かに神によってまことの地を受け継ぐ者となるのです。

私たちは果たして柔和な者でしょうか。この真の強さを持っている者でしょうか。これはこれまで見て来た通り、神が私たちにくださる性質です。神との関係から、神への信頼から、生まれるものです。私たちは神を見上げ、神が私を心にかけて、愛してくださっていることを確信するところから、益々この「柔和」という特性を発揮する者とさせていただくことができますように！そういう人たちが地を受け継ぐと言われていました。天国は自己主張する人が自分の力で奪い、つかみ取るものではありません。そうではなく、神の前にへりくだり、神に信頼する柔和な人が受け継ぐのです。私たちはそのような者として歩みたいと思います。天におけるまことの相続地を受け継ぐことへと至る

この幸いな道を、日々神との交わりの中で進んで行きたいと思います。